スペイン・ラテンアメリカ通信

第１６号

京都外国語大学外国語学部スペイン語学科編

本誌はスペイン語とスペイン語圏の文化･社会･歴史の専門家が、スペイン語を学ぶ高校生や大学生に向けて発信するアカデミック情報誌です。

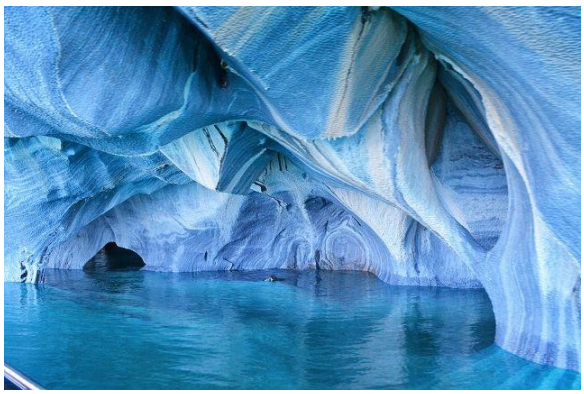
スペイン語圏の自然　A～D はスペイン語を公用語とする南米の国で見られる絶景です。それぞれどこの国にありますか?（答えは８頁）



（A）　ウユニ塩湖



（B）　レインボーマウンテン



（C）　マーブル・カテドラル
（大理石洞窟）



（D）　ペリト・モレノ氷河
（世界遺産ロス・グラシアレス国立公園）

スペインが生んだ世界的ポップアイコン、ロザリアの挑戦

近年、言語や国境の壁を越えて世界中の若者を魅了しているスペイン出身のアーティストがいる。その名はロザリア（Rosalía）。2022 年に発表されたアルバム『Motomami』の収録曲「Chicken Teriyaki」の斬新なミュージックビデオや軽快なリズムを耳にしたことがある人もいるだろう。彼女はスペインの伝統芸能である「フラメンコ」を真のアイデンティティとしながら、現代のレゲトンやトラップ、ドミニカ共和国発祥のバチャタ（ロメオ・サントスとの共演曲「El pañuelo」など）、さらには電子音楽やクラシック音楽までを融和させ、前例のない新しいポピュラー音楽を生み出し続けている。そこで、伝統の継承と大胆な革新に挑むロザリアの軌跡を通じ、現代のヒスパニック文化における「伝統と革新」、そしてグローバル化時代における文化のあり方について考えてみたい。

ロザリア（本名 Rosalía Vila Tobella）は 1992 年、スペインのカタルーニャ州バルセロナ郊外の町で育った。音楽好きな家庭ではあったものの、当初からフラメンコに囲まれていたわけではない。彼女がフラメンコと運命的に出会ったのは 13 歳の時である。偶然街中でカマロン・デ・ラ・イスラやパコ・デ・ルシアといった伝説的なフラメンコ歌手やギタリストの音楽（「ブレリアス」と呼ばれる躍動的なリズムの曲）を聴き、その魂を揺さぶる歌声に深い衝撃を受けた。「私はフラメンコを歌う！」と心に決めた彼女は、ここから本格的な音楽の道へと歩み出す。

15 歳の時、彼女はスペインのテレビのオーディション番組『トゥ・シ・ケ・バレス（君には才能がある）』に出場した（写真 1）。しかし、最初のステージで審査員から「曲の間中、ずっと音程が外れていた」「個性や個的な魅力が足りない」とかなり厳しい酷評を受け、あっけなく落選してしまう。しかし、15 歳のロザリアの反応は驚くべきものであった。彼女は取り乱すことなく審査員にお礼を述べ、「私はプロの方から学ぶためにここに来ました。これからもたくさん練習して、もっと上手になって、素晴らしい歌手になります」と言い切ったのである。15 歳にして己の未熟さを受け入れ、学びの糧とする強い意志と芯の強さがここには表れていた。

その後、17 歳で喉を酷使したことによる声帯の手術という大きな試練にも直面するが、手術を無事に乗り越え、彼女の音楽への情熱が折れることはなかった。



写真 1：オーディション番組
「トゥ・シ・ケ・バレス（君には才能がある）」

挫折と手術を乗り越えた彼女は、18 歳でバルセロナの超名門「カタルーニャ高等音楽院（ESMUC）」に入学した。この学校のフラメンコ歌唱コースは毎年わずか 1 名程度しか合格できない超難関である。ここで彼女は名匠ホセ・ミゲル・ビスカヤ（通称チキ）のもとで 8 年間にわたり厳格なフラメンコ理論と声楽技術を叩き込まれ、2017 年に無事卒業した。

ロザリアの真骨頂は、感覚だけに頼る感覚派ではなく、伝統音楽の理論と構造を完璧に叩き込んだ「学術的実力派」である点にある。彼女の卒業論文として制作された 2nd アルバム『エル・マル・ケレル（El mal querer）』（2018 年）は、13 世紀の中世プロヴァンス語の恋愛小説『フラメンカ』から着想を得たコンセプトアルバムであった。男性の嫉妬と束縛に苦しむ女性の物語を、古典的なフラメンコの歌唱法に現代のアーバンミュージックや電子音を融合させて表現したこの作品は、リリースされるやいなや世界中で大ヒットを記録し、ラテン・グラミー賞を多数受賞するなど世界的な評価を確立した。

世界的スターとなったロザリアは、一度確立した成功にとどまることなくさらなる実験を重ねていく。2022 年のアルバム

『Motomami』では、「強さと儚さ」「現代性と根源性」という対極の概念をテーマに、ユーモアと前衛性が交錯するポップアートを展開した（写真 2）。



写真 2：ロザリア、スペイン・ビルバオでのライブコンサート（2022 年）

さらに、2025 年のアルバム『Lux』では、クラシック音楽の荘厳なオーケストレーションとフラメンコ、そして現代の都市型ラップを見事に融合させている。「Berghain」や「La Reliquia」（写真 3）、さらには言葉の巧みな連鎖（詩的技法）が際立つ「La yugular」といった楽曲では、クラシックの伝統美とフラメンコの情熱、そしてストリートの鋭い感覚が見事に同居しており、彼女の音楽的探求心が今なお進化し続けていることを証明している。

スペイン語の歌詞（オリジナル）	日本語訳
En Japón, lloré	日本で、私は泣いた、
Y mis pestañas deshilé	涙でまつ毛がほどけてしまうほどに。
Y en la ciudad de cristal	そしてガラスの街（シウダ・デ・クリスタル）で、
Fue que me trasquilé	私は髪を台無しにされて（髪を切られて）しまった。
Pero el pelo vuelve a crecer	だけど髪の毛はまた伸びてくる、
La pureza también	純粋さも同じように。
La pureza está en mí	純粋さは私の中にある、
Y está en Marrakech, no, no	そしてマラケシュの街にもある。
No soy una santa, pero estoy blessed	私は聖女なんかじゃない、だけど恵まれている（祝福されている）。

写真 3：楽曲《La reliquia》の歌詞（抜粋）

しかし、彼女の華々しい成功の裏には、現代の文化批評において極めて重要な議論が存在する。それが「文化の盗用（Cultural Appropriation）」をめぐる批判である。

フラメンコは歴史的に、スペイン南部アンダルシア地方で迫害を受けてきたロマ（ジプシー）の人々の苦難や誇りの歴史と深く結びついている。カタルーニャ出身でロマの血を引かない白人女性であるロザリアに対し、一部のロマ系アーティストや知識人からは、「彼女はロマの文化をスタイリッシュな『衣装』として消費しているだけで、ロマが直面してきた社会的な差別や苦難には関心を払っていない」という厳しい声が上がった。

これに対しロザリアは、「音楽は血液や土地に縛られるものではない。フラメンコ自体が、ロマ、アラブ、ユダヤ、スペインの多様な文化の交差点で生まれた融合の芸術であり、敬意をもって学び研究した上で新たな表現に挑戦することは文化への貢献である」という旨の反論を行っている。この議論は、他者の伝統文化をどこまで尊重し、どのように新たな創作へ取り入れるべきかという、現代のグローバル社会や多文化共生が直面する本質的な問いを私たちに投げかけている。

ロザリアの歩みは、私たちに多くの教訓を与えてくれる。第一に、15 歳での失敗や酷評を跳ね返したように、批判や挫折を自己成長の糧に変える強い精神力である。第二に、真の「革新」とは、単なる表面的な流行の追随ではなく、伝統への深いリスペクトと徹底した学びの基礎の上にしか成り立たないという事実である。

Daniel Arrieta（ダニエル・アリエタ／比較文学）

スペイン語のことわざ

El mejor escribano echa un borrón.

最も優れた書記官がインクの染みをこぼす。

→弘法も筆の誤り

肖像画は本人に似ていないとダメ？

私たちが友達の写真を撮るとき、たいていその人をきれいに写そうとします。顔立ちがはっきりしていて、表情が良く、そして何よりも写真を見ればその人だとわかるように気を配り

ます。誰かの肖像画を描くときも、おそらく同じことをしようとするでしょう。しかし、優れた芸術作品であるためには、肖像画はその人物に似ていなければならないのでしょうか？ 20 世紀の最も重要な芸術家の一人であるスペインの画家パブロ・ピカソ(1881-1973)は、この問いに対する答えがそれほど単純ではないことを私たちに教えてくれます。ピカソは生涯を通じて実にさまざまな方法で顔を描き、スケッチもしました。非常に写実的な作品もあれば、目や鼻、口が思いもよらない場所に描かれている作品もあります。一体なぜでしょうか？

ピカソの最も有名な肖像画について深堀りしていく前に、重要な前提を一つ押さえておきましょう。それは、ピカソは写実的に絵を描くことができたということです。彼の父親は美術の教師で、ピカソは幼いころから伝統的な技法を父親に教わっていました。ピカソは、人体や顔を正確に表現する技法を身に着け、どんどん腕を上げていきました。その好例が、1936 年に描かれたドラ・マールの肖像画です。ドラ・マールはフランス人の写真家・芸術家で、パリでピカソと出会い、彼の人生と作品においてきわめて重要な人物となりました。この肖像画では、彼女の顔が誰のものかを見分けることができ、顔立ちの細かな特徴も観察できます。ピカソは、想像上の人物ではなく、実在する特定の人物を描いているのです。このスケッチをドラ・マールの写真と比べてみると、同じ女性であることが簡単にわかります(写真 1)。

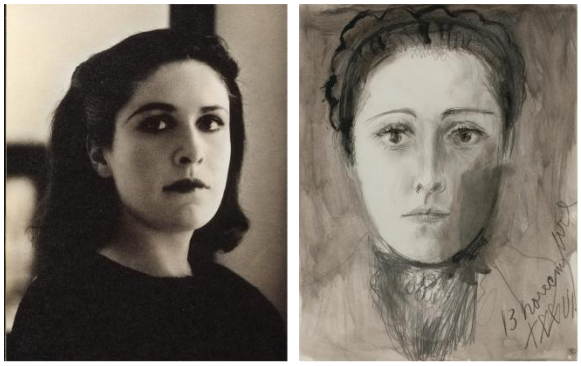


写真 1：ドラ・マール
左がロジ・アンドレによる写真（1941 年)、
右がパブロ・ピカソによるデッサン（1936 年）

ピカソが人の顔を伝統的な方法とは異なる描き方をしたのは、伝統的な方法で描くことができなかったからではありません。彼は、専門学校で習うような模範的な技法を完璧に習得していたのですが、もっと別の表現の可能性を探求したいと考えていたのです。

私たちがある人を見るとき、通常、その人の顔の一部分しか見ていません。正面を向いていれば、両目と鼻、口を見ることができます。横を向けば、その人の横顔が見えます。頭の後ろ側を見るには、その人の周りを移動する必要があります。しかし、考えてみてください。もし一枚の絵の中にこうした複数の視点を同時に表現できるとしたら？ これが「キュビスム(＝立体主義)」の考え方です。キュビスムとは、20 世紀初頭にパブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックによって開発された芸術運動です。キュビスムの画家たちは、事物を私たちが見たとおり正確に表現しようとはしませんでした。むしろ、人物や物体のさまざまな側面を表現するために、形を写実的に描き遠近法に従うという絵画の常識に挑戦しました。ピカソはキュビスムの手法で多くの肖像画を描き、そのうちのいくつかでドラ・マールがモデルを務めました(写真 2、3)。これらの肖像画の中には、正面を向いているように見える目と、横顔のように描かれた鼻が同時に見られるものがあります。また、顔の各部位のバランスもゆがめられています。片方の目がもう片方の目よりもずっと大きく描かれ、口が思いもよらない位置に配置されていることさえあります。



写真 2：パブロ・ピカソ作《ドラ・マールの肖像》(1937 年)



写真 3：パブロ・ピカソ作《ドラ・マールと猫》（1941 年）

一見すると、これらの絵は奇妙に感じられるかもしれません。しかし、注意深く観察すると、顔のさまざまな部分を見分けることができます。ピカソは完全に現実味を取り除いたのではなく、それを新しい方法で表現したのです。ドラ・マールの 3 枚の肖像画を比較すると、一人の人物を表現する方法は一つだけではないことがわかります。最初の作品でピカソは写実的な描き方をしています。残りの 2 枚では常識を破り、顔の特徴をわざと変形させています。興味深いのは、3 枚の絵がすべて同じ女性を描いているということです。変わったのは人物そのものではなく、画家がその人物をどのように表現しようとしたかという点です。

さらに言えば、肖像画というものは容姿以外の何かを伝えることができます。顔の表情、体の姿勢、色彩、形状などは、描かれた人物に対する私たちの認識のあり方に影響を与えます。芸術家は、その人物の性格や感情、あるいは外界の独自の捉え方を表現しようとすることがあります。ピカソの場合、わざと形をゆがめる技法は、いろいろな描き方を試してみたいという願望や、芸術の常識に疑問を投げかけたいという願望の表れでもあると言えます。彼にとって絵を描くことは、目の前にあるものをただ写し取ることではなく、現実を表現する新しい方法を探し求めることだったのです。

そこで問いかけてみます。肖像画は本人に似ていなければダメでしょうか？ 答えは「ノー」です。少なくとも、「絶対に似ていないとダメ」とは言い切れません。肖像画には、たしかに人物の顔立ちを正確に描き出す写実的なものもあります。しかし、別の考えを表現するために、顔の特徴をゆがめたり、単純化したり、変形させることもあります。ピカソは、芸術とは私たちの目に映るものを再現するだけではないことを教えてくれます。彼は私たちに、別の視点で物を見てみること、普段は見過ごしてしまう側面を発見すること、そして想像力を働かせて新たな可能性を探ることを促しているのかもしれません。

みなさんが今度何か肖像画を見る機会があれば、その絵が本人に似ているかどうかだけでなく、どのように表現されているかにも注目してみてください。「画家は何を表現しようとしたのだろう？」、「画家は何を変えたのだろう？」、「画家が選んだ描き方はどのような効果を生み出しているのだろう？」―このような問いかけをすれば、芸術において人物を描き表すことは、単にその人の顔をそっくりに写すことではないと気づくはずです。それはまた、私たちがその人物をどのように見たいのか、そして人々にその人物をどのように見てほしいのかを決めることでもあるのです。

Gisele Fernández Lázaro

（ヒセレ・フェルナンデス・ラサロ／スペイン芸術・演劇）

tomate, chocolate, patata: 共通点は？

「トマト（tomate）」、「チョコレート（chocolate）」、「ポテト（patata）」―いずれも私たちの日常に欠かせない食べ物ですね。これらはスペイン語単語としてもたいへん覚えやすいのではないでしょうか。

唐突ですが、ここでクイズです。―これら 3 語の共通点は？ ただし、食べ物を指す語であることを除いてです。

答えはいずれも「ラテンアメリカの先住民が話していた言語に由来する語」です。言い換えれば、1492 年にコロンブスが新大陸に到達した後、ラテンアメリカ原産のさまざまな食物とともに、それらの名称としてスペイン語に入ってきた外来語です。これらの語は、その後、他のヨーロッパ諸語にも広まり、日本語にも英語などを通じて取り入れられました。

16 世紀、スペインによる新大陸の植民地支配が始まった頃、アメリカ大陸における先住民の言語は実に多様でした。一説によると、アメリカ大陸にはもともと千種類をはるかに上回る数の言語が話されていたようです。スペイン人のエルナン・コルテスによって滅ぼされたアステカ王国は、現在のメキシコ南部高地にありました。メキシコといえば今でも多数の先住民語が残存する国です。その多様な民族を統括するために、アステカ王国では「ナワトル語」という言語が事実上の公用語として機能していました。現在の私たちが普段何気なく用いている「トマト」や「チョコレート」という単語の起源が、このナワトル語だったと聞けば少々驚かれるかもしれません。「トマト」はナワトル語で tomatl といい、これがスペイン語に伝わって tomate に、さらに英語に入って tomato になりました。「チョコレート」の由来はナワトル語で「苦い水」を意味する xocoatl だと言われています（ただし、異説もあります）。日本でチョコレートは「菓子」であり、食べ物として扱われていますが、本来これは飲み物です。現にスペインでは、チョコレート（チョコラテ）が飲み物としても親しまれ、これにチュロス（churros）を浸して嗜（たしな）むのが定番になっています（写真 1）。



写真 1：飲用のチョコラテとチュロス
（マドリードの老舗カフェにて：筆者撮影）

ナワトル語に由来する語は他にもあります。たとえば aguacate「アボガド」や chicle「チューインガム」、それにチョコレートの原料である cacao「カカオ」などがそうです。

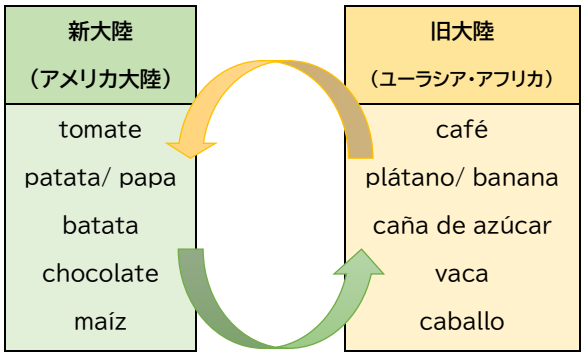
さて、ジャガイモの原産地はどこかご存じでしょうか。それは南米のアンデス地域です。スペイン人が到来したときのアンデスといえば、インカ帝国が栄えていました。そのインカ帝国の王アタワルパを捕らえ、処刑したのがフランシスコ・ピサロです。インカ帝国もさまざまな民族を統合しながら成立しましたから、日常的に話される言語もまた多様でした。そうした中で共通語として用いられていたのが「ケチュア語」です。そのケチュア語で「ジャガイモ」のことは papa と呼ばれていました。現在でもラテンアメリカ全域で「ジャガイモ」は papa というのが普通であり、patata は聞かれません。それなら、なぜスペインでは patata というのか？ これはスペイン人による造語です。同じイモでも「サツマイモ」を指す batata という語が別ルートから入ってきており、papa と batata が混同されて両者がくっ付いたためです。なお、batata の起源はカリブ海域にかつて存在した「タイノ語」という、今では死語になった言語です。コロンブスが最初に遭遇した先住民はタイノ語話者だったようです。そのため、このタイノ語発祥でスペイン語を経由して世界に広まった単語もまた少なくありません。具体的には、canoa「カヌー」、maíz「トウモロコシ」、barbacoa「バーベキュー」、huracán「ハリケーン」、hamaca「ハンモック」などです。

旧大陸、つまりユーラシア大陸にトマトやジャガイモを持ち込んだのは 16 世紀のスペイン人です。今でこそ世界中のどこにでもあるトマトソースのピザやパスタ。典型的なイタリア料理だけに、イタリアでは太古の昔から食されていたと思われるかもしれませんが、それは錯覚です。コロンブスが新大陸に到達するより前の時代のヨーロッパにトマトを原料とする味付けが存在したはずはありません。パスタそのものはイタリアで中世から食べられていましたが、チーズやバター、スパイスなどで味付けしたものが主流でした。ただし、16 世紀になって新大陸発祥の農産物がもたらされた瞬間に、ヨーロッパ人の食生活が劇的に変化したわけではありません。旧大陸の人々からはトマトにもジャガイモにも毒があると信じられ、異境から来た珍しい観賞用植物としてしか扱われていませんでした。これらが食

用化されるのは 18 世紀になってから、国民的な食材として広まるのは 19 世紀のことです。

ところで、現在のラテンアメリカで栽培されるメジャーな農産物と言えば、コーヒー豆（café）、バナナ（plátano, banana）、サトウキビ（caña de azúcar）が思い浮かびますね。ラテンアメリカでは大昔からコーヒーが飲まれ、バナナが食べられていた？―とんでもありません。コーヒーの原産地はアフリカのエチオピア、バナナとサトウキビは東南アジアや南アジアです。したがって、コロンブス到来以前のアメリカ大陸にこれらの農産物は影も形もありませんでした。ラテンアメリカがコーヒーやバナナで有名になったのは、ヨーロッパ人が大西洋を越えて新大陸に持ち込み、大量生産を始めた結果です。同じことは牛（vaca）や馬（caballo）についても言えます。南米ラプラタ川流域のアルゼンチンとウルグアイは世界有数の牛肉産出国であり、消費大国でもあります。この辺りはパンパと呼ばれる草原地帯で、そこで良質の牛が大量に放牧されているためです。19 世紀頃までは「ガウチョ（gaucho）」と呼ばれる優れた乗馬技術を持ったカウボーイたちが放牧牛を管理し、解体する任務を負っていました。ところが、牛も馬もアメリカ大陸にはもともと存在しなかった動物で、16 世紀にスペイン人が持ち込んだのが始まりでした。

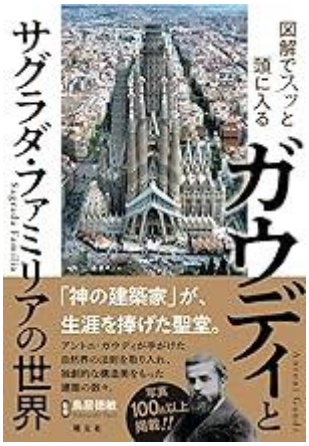
興味深い話ですね。ラテンアメリカが産地として有名なコーヒー、バナナ、サトウキビ、牛肉は旧大陸からもたらされたものであり、現在の私たちの食生活に欠かせないトマト、ジャガイモ、チョコレート、トウモロコシなどはスペイン人が新大陸から運び入れたものです。歴史の分野ではこれを「コロンブス交換」といいます。これらはいずれも大西洋を横断する船舶で運び込まれた大航海時代の産物です。



コロンブス交換によって新大陸にもたらされたものは生活必需品ばかりではありません。中には全然ありがたくないものも含まれていました。それはウイルスや病原菌です。もともとアメリカ大陸には天然痘、麻疹（はしか）、インフルエンザといった病気がなく、これらの原因となるウイルスを持ち込んだのはヨーロッパ人でした。これらのウイルスの感染拡大によって、免役を持っていなかったがために壊滅的な被害を受けた先住民もいました。皮肉なことに、コロンブス交換には悲劇的な負の側面もあったのです。

岡本信照（おかもと　しんしょう／スペイン語史）

【読書案内】『図解でスッと頭に入る　ガウディとサグラダファミリアの世界』

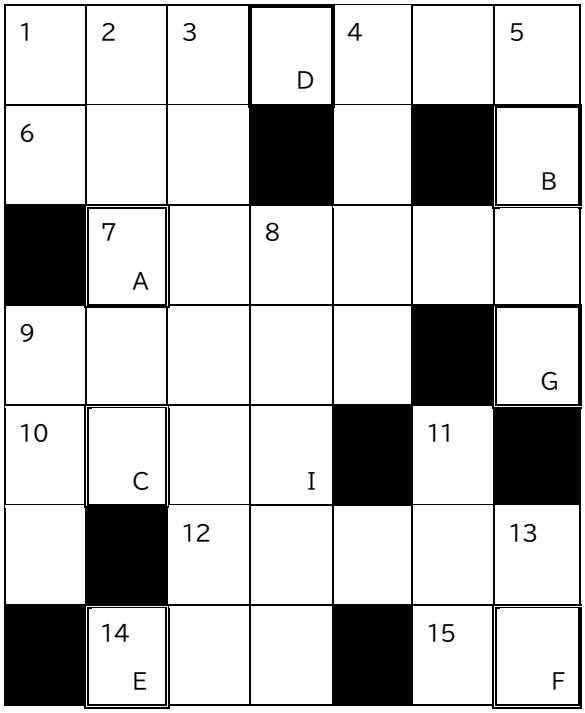


鳥居徳敏、昭文社、2026 年、全 128 頁

今年 2026 年はガウディ没後 100 周年。その記念すべき年に待望のサグラダファミリア主塔が完成した。これを機に、多種のガウディ関連図書が新刊あるいは増版の形で出版されている。ガウディに関心がある人は、写真満載で解説のわかりやすい本書を是非手に取ってほしい。その他関連図書として、別冊宝島編集部（編）『知れば知るほど泣けるガウディ』（宝島 SUGOI 文庫、2026）、外尾悦郎『ガウディの伝言』（光文社新書、2006）、鳥居徳敏（監修）『角川まんが学習シリーズ　まんが人物伝　アントニ・ガウディ　世界遺産を生んだ建築家』（KADOKAWA、2026）も紹介しておこう。

CRUCIGRAMA 16

1 マスに大文字 1 字を記入してください。CH, LL, RR は 2 文字扱いです。アクセントつきの母音(Á, É, Í, Ó, Ú)とアクセントなしの母音は別の文字とします。二重線の A～G を並べ替えてできたスペイン語圏の地名を当ててください(答えは次号)。　(出題／岡本信照)



タテのかぎ (VERTICAL)

1. ¿Crees que es verdad?-Sí, ____ creo.
2. 「木」。
3. 「守衛、門番」。サッカー用語では「ゴールキーパー」。
4. 「狩りをする」を意味する動詞の 1 人称単数現在。
5. Esta ensalada está ____.「このサラダは味が薄い。」
8. 「米、ライス」。
9. ¿Hay un buen restaurante ____ aquí?「この辺に良いレストランはありますか？」
11. ¿____ quién vives?「君は誰と住んでいるの？」
13. ____ quieres, vamos juntos.「君がよければ一緒に行こう。」

ヨコのかぎ (HORIZONTAL)

1. 「鉛筆」の複数形。綴りに注意。
6. 「金メダル」のことを medalla de ____という。
7. 「腕」の複数形。
9. 「雄馬」は caballo、「雌馬」は yegua。では「子馬」は？
10. 「匂いがする」という動詞の不定詞(＝原形)。
12. dos bolígrafos ____.「2 本の赤いボールペン。」
14. Él habla en ____ alta.「彼は大声で話す。」
15. No tomo café ____ té.「私はコーヒーも紅茶も飲まない。」

A～G を並べると?

A	B	C	D	E	F	G

CRUCIGRAMA 15 (第 15号)の解答

E	S	C	U	E	L	A
N	I	■	Ñ	■	E	S
■	L	L	A	M	A	N
A	L	A	S	■	L	O
T	A	N	■	P	■	S
A	■	A	M	A	S	■
S	U	■	E	R	E	S

A～G の答え： PESTAÑA「まつげ」

―1 頁のクイズの答え―

(A) ボリビア (B) ペルー (C) チリ (D) アルゼンチン

今回の記事執筆者(掲載順)

ダニエル・アリエタ(京都外国語大学准教授)

ヒセレ・フェルナンデス・ラサロ(京都外国語大学准教授)

岡本信照(京都外国語大学教授)

スペイン・ラテンアメリカ通信　第１６号

2026 年 11 月 10 日発行

発行者：京都外国語大学外国語学部スペイン語学科

〒615-8558　京都市右京区西院笠目町 6

URL. https://www.kufs.ac.jp

E-mail. s_okamot@kufs.ac.jp

京都外国語大学
Kyoto University of Foreign Studies